

トウツルモドキでカゴ作り

11月25日、26日の2日間、恩納村博物館において博物館講座「トウツルモドキでカゴ作り」を開催しました。竹などで作られたカゴやザル類は民具の中でも代表的な道具であり、かつては生活必需品でした。形や大きさ、編み方により呼び名や用途が違うのも特徴であり、かつては自分たちの手で作られていた消耗品です。しかし、今では手作りのカゴは工芸品として人々に好まれています。そこで、博物館が実施する物作り講座として、昔ながらの自然素材を材料に、カゴを編む体験をとおして、民具に対する理解やかつての人々の技術や知恵、生活について知る機会となるよう企画しました。また、以前のカゴ作り講座は竹を材料にしていたのですが、村内で採取できる他の植物にも目を向け、村内の植生や植物利用に対する興味関心を深めていただけるよう、今回は材料にトウツルモドキを選びました。

① 材料集め

講座の開催に先立ち、講師の方々と一緒にカゴ作りに使うトウツルモドキを村内で採集しました。トウツルモドキは蔓(つる)性の低木で、葉の先を他の樹木などに引っ掛けるようにして、上に伸びていきます。カゴ作りに利用できるほど成長しているトウツルモドキは1株から何本も蔓が伸びているので、それを探します。できるだけ、長く真っ直ぐ伸びている物がカゴ作りに向いています。今回は受講者が作るカゴのサイズを事前に決めていたため、それに合う長さを確保できる蔓を頑張って集めました。



② ヒゴ作り

講座1日目はカゴを編むのに使うトウツルモドキをナタで割り、中の繊維を削りながら、薄いヒゴを作っていました。長いもので3.5mあるトウツルモドキを4分割にする作業には技術が必要なため、講師が行っていましたが、その他の短い材料については参加者自らが行いました。竹は中綿を裂くようにして薄くしていきますが、トウツルモドキはナタを使って、削りながら薄くしやすいため、初心者にはより加工がしやすいかもしれません。しかし、参加者たちは日頃使い慣れていないナタでの作業に苦戦していました。ここでできるだけヒゴを薄くしておかないと、編み上げの際にヒゴが硬く柔軟性が足りず、とても苦勞します。



講師のお手本



ヒゴ作りをする参加者

③ カゴの編み上げ

2日目にカゴの編み上げを行いました。カゴを編む際には底の部分から作り、徐々に立ち上げていきます。自然素材のため、それぞれ幅や曲がりの癖が違うヒゴをカゴの形に並べて編むのは思いのほか難しく、参加者たちも苦戦していました。また、ヒゴを作る際に薄くできていないものがあると編むのに力が必要になります。最後に行う縁の部分の仕上げや持ち手を付ける作業などはさらに難易度が高いため、講師の方々に指導していただきながら、何とか完成させることができました。



今回の講座は参加者から大変好評でした。また、定員を超える申し込みがあるなど人気の講座でしたので、博物館では今後も継続して取り組みたいと思っています。